

平成 25 年度校内研究概要

(A 部門)

昨年度は、個別授業における支援の手だてについての研究に取り組み、一定の成果をあげた。これをふまえて 25 年度は、集団の中の一人として行動する力を高めるための取組について研究することにし、3 ケースを取り上げた。まず、集団活動に抵抗感がある児童生徒が参加しやすい内容の集団活動場면을継続的に設定し、友だちと一緒に活動することが楽しいと感じられるようにした。そして、参加に際して、不安要素を確認し適切に対応するために、個別に聞き取る時間を事前に設定することで安定した気持ちで取り組むことができた。活動を積み重ねる過程では、集団活動の課題を徐々にレベルアップし、児童生徒同士が相談して課題解決しようとするなど、主体的に活動に取り組めるようになってきた。このような取組から、教科指導の場面でも、在籍児童生徒数が少ないためマンツーマンでの指導になることが多いが、教員が「集団授業であればどうするか」ということを意識して指導にあたる必要があるという共通認識を持った。

(B 部門)

B 部門は、からだの動きから児童生徒を 3 つの課題別グループに分け、授業を行ってきた。3 年間の取組により、グループはピーナッツバルーン、グループはエアトランポリン、グループは風船シート・エアマット・ハンモックを用いて楽しみながら興味関心を広げていくことができた。そして、緊張がゆるむことを快の表出ととらえること、小さな変化を見逃さないことを大事な視点として押さえてきた。

快と動きを引き出すための手立てや支援の仕方を工夫する中で、児童生徒は心から心地よいと感じたときに、自発的な身体の動きや心の動きを快の表出として表すということを確認することができた。

また、活動に対する安心感や期待感、拒む気持ち、友達と張り合う気持ち等、より複雑で深い気持ちの動きが生じていることに、改めて気付くことができた。この成果を今後どのように広げていくかが課題である。

(C 部門)

昨年度までの研究の集大成として、引き続き『小児の高次脳機能障害の支援～ガイドブック作り』というテーマで研究に取り組み、『小児の高次脳機能障害支援ガイドブック・チェックリスト付』を完成させることができた。ガイドブックは、在籍児童生徒の保護者や転出先の学校の先生方に配布するほか、学校のホームページからダウンロードもできるようにした。昨年度でほぼ完成していたチェックリストに加えて、高次脳機能障害によく見られる症状についての解説や対応策つきの事例集なども掲載した。また、作成にあたっては、保護者や小・中学校の先生方が読みやすいものになるよう工夫し、小・中学校の先生

方にこのガイドブックを活用していただくことにより、高次脳機能障害を負った子どもたちがより安心して充実した学校生活を送ることにつながるよう配慮した。今後は、このガイドブックがどのように活用されているか、さらにどんな内容を盛り込む必要があるかなど、転出先の学校の先生方や保護者の協力を得て調査し、よりよいものになるよう研究を続けていきたい。

(D部門)

弘済学園内で生活しているD部門の児童生徒は、家庭に戻ったときに学園での落ち着いた生活を保ち続けることが難しい場合が多い。今年度は学習時間から学園生活へ、そして家庭へと「表現の汎化をすすめる」ことを研究のテーマとした。また、学園や家庭との連携をその重要な要素として取り組みをすすめた。

研究方法としては、4ケースを取り上げ、望ましい姿や取り組み方法などの共通項目を設定し、児童生徒の特性に合わせて行う日常の学習指導をもとに、言語聴覚士によるアドバイスも参考にしながら実践を深めていった。

それぞれの状況に合わせた取組によって、汎化のきっかけづくりを図ることができた。この実践が継続的なものになることにより、児童生徒の暮らしやすさに繋がっていくことを期待したい。

(E部門)

E部門では、働く力を育てる指導～「職業自立」とその他の授業の関連について～をテーマとした。働くために必要な力とは何かを考え、学校生活全般において働く力を育てるための実践を検証していくことで 研究をすすめた。研究単位は学年とし、各学年ごとにケースをあげて事例研究を行った。「職場に求められる就労に必要な基本的なスキル(進路指導の手引き～資料編～神奈川県教育委員会 H25.4より)」のチェックと6月の実習評価により、対象生徒の課題のとらえ直しをし、個別教育計画と照らし合わせて授業作り・実践・検討を重ねた。例えば、Aさんについては、当初社会生活面の評価が極めて低かったが、「挨拶」、「大きな声」、「目と手の協応・運動」、「人に聞くことができる」、の4点が課題であると明確化し、具体的な手だてを考えたことで、課題の改善と本人の成長に結びついた。働くために大切なことについて考えるよい機会になったが、各授業の関連や指導体制が今後の課題である。